



LEAFが管理する甲山自然環境センター

**第61回テーマ：
六甲山系を含む
里山保全と環境学習**

講演内容

- 環境問題の中の民主主義
- 子ども環境活動支援協会の概要
- 環境学習は不易流行

実施日：平成20年4月19日（土）
午後1時～3時45分
場 所：六甲山自然保護センター



講師：小川 雅由さん
プロフィール

1953年大阪府出身。72年西宮市役所に入所。06年西宮市役所を退職、07年NPO法人子ども環境活動支援協会事務局長に就任。環境庁・環境省の委員を歴任。

曇り空に満開の山桜

この日は、あいにく曇り空の六甲山でしたが、ドライブウェイの道すがら満開の山桜が目を和ませてくれました。山上につくと、気温は12℃。小雨がちらつき、冬に逆戻りしたかと思うほどの肌寒さでした。半年ぶりの自然保護センターに入って、ストーブで暖まりました。

ボランティア活動には11名が参加。散策路の枯れ枝の伐採などをする班と、散策路をひととおり回って、整備が必要な部分をチェックする班に分かれて活動しました。

小川さんは環境学習の先駆者

市民セミナーでは、NPO法人子ども環境活動支援協会（LEAF）事務局長の小川さんにお話いただきました。小川さんは西宮市職員として20年以上環境教育に携ってこられました。平成10年の設立時からLEAFで活動され、2年前に市を退職後、事務局長として子どもの環境学習の分野で目覚ましい活躍をされています。まさに市民サービスを体現されています。

子どもをキーにして地域全体を巻き込み、市民の力で環境を変えようという試みなど、今後の環境学習の展開を分かりやすくお話いただきました。



子ども農業塾の参加者

環境学習は不易流行

環境問題は時代によって変わっていく。環境学習はずっと続けていかななくてはならない。20世紀は

他人の幸せを無視して、自分の幸せだけを求めた。その結果、環境問題が起きた。企業の社会的責任（CSR）はその反省から生まれた。環境に携る人は、環境分野ばかりやるのではなく、平和や政治経済など、幅広い問題を考えないといけない。21世紀は統合的にものを考える力が必要だ、とお話されました。

社会活動の取り組みを触発された

小川さんが展開されている環境学習の活動は、環境との関わり方を変えるために必要な仕組みを十分に練られたものです。また、一過性の試みではなく、子どもから大人まで、一般市民から事業者までを巻き込んだ日常的な取り組みとして継続されています。先見力を持ってNPO法人を事業として成立させている小川さんに敬服します。私たちも六甲山での活動を幅広い視点から考え直す示唆を得ました。

※詳しくは、1、2ページをお読みください。

参加の感想 長谷川 友彦さん



私の知る環境とは、大人や公が中心となっていくもので、小学校から取り組まなければならないと思ってみませんでした。ところが小川先生の環境学習講義を授かり、環境とは各個人の身近なところにあり、市民全体が参加しなければ解決しないことが分かりました。特にエコカードを利用した、環境意識を小学生時代から地域及び自然や学校、家庭をつなぐ学習を行っておられることを知らされました。素晴らしいと感じております。

【助成金をいただいている機関】
コベルコ環境保全基金

主催：六甲山自然保護センターを活用する会
協力：兵庫県立人と自然の博物館
後援：兵庫県神戸県民局 灘区役所 神戸市教育委員会



第61回テーマ：六甲山系を含む里山保全と環境学習



第61回市民セミナーの流れ

市民セミナー

- 1. あいさつ：13:00～13:10
- 2. 講演：13:10～14:40
- 3. 休憩：14:40～14:55
- 4. 質疑応答：14:55～15:45

講演

- 環境問題という民主主義
- 子ども環境活動支援協会の概要
- 環境学習は不易流行



セミナーの様子

講演の挨拶(小川さん)

子ども環境活動支援協会事務局長の小川といいます。高校を出てすぐ西宮市に就職し、2年前に退職しました。34年の在職期間のうち、23年間は環境局で勤務していました。六甲山の東の端の話が中心になるとは思いますが、よろしくお願ひします。



小川さん

講演内容

1. 環境問題の中の民主主義

■自分の目で見て暮らしを振り返る

環境局では水生生物調査で川に入り、大人になって初めて川の中から街並みを見た。下水管から汚水が出てくる。下水の出ないところではサワガニがいる。自分の目で見て、暮らしを振り返ることができる環境教育が大事だと感じた。そして、川の健康診断を通じた啓発事業を始めた。

■外国人登録の仕事で芽生えた人権の意識

環境局に来る前、20代後半のとき外国人登録の仕事をしていました。外国人は「管理対象」として扱われる。人権の意識が芽生え、公務員として誰のために仕事をしているのか考えさせられた。

■人と自然の対峙から環境教育を考えた

外国人登録の仕事の後、環境局に来て、今度は人と自然の対峙を考えた。人間は圧倒的な存在でやりたいことをやる。他の生き物が守られる権利があってもいい。環境問題の中で民主主義をやるために、環境教育が必要だと思った。

環境教育を学んで、環境活動を始めた人と私はスタンスが違う。公務員としての生き方の迷いが私の底流にある。

2. 子ども環境活動支援協会の概要

■子ども環境活動支援協会（LEAF）とは

「子ども環境活動支援協会」は平成10年につくられた。西宮市では以前から子ども対象の環境教育の事業をしていたが、市外にも事業を展開できるよう、市の外の団体としてつくられた。



LEAF事務局

西宮市から机1個だけ借りてスタートした。徐々に規模を拡大し、平成14年にNPO法人格をとった。現在、アルバイトも含めスタッフは20名おり、事業規模は9,000万円までになった。こうなると企業そのもので、運営のエネルギーだけでも、相当な力が必要になっている。

■子ども環境活動支援協会の事業内容

協会は、「子ども」「環境」「教育」を三本柱に据え、「市民」「行政」「事業者」の三者が混ざり合って組織運営をしようという団体だ。

<事業内容>

- ①地域に根ざした持続可能な社会に向けた教育の調査研究事業
- ②自然体験活動を推進するための支援事業
- ③企業会員と連携した環境教育事業
- ④世界の子どもの環境活動交流事業

■「エコカード」で地域全体の環境を改善する

西宮の小学生に「エコカード」を配布している。学校で環境教育の授業を受けたり、地域のお店で環境にやさしい商品を買うと、カードにスタンプを押してもらえ。スタンプが10個集まると、「アースレンジャー」として認定している。同様の活動を保育所や中学校でもやっている。

環境学習の意味や課題を、子ども・大人を含めた地域全体で日常的に改善していく。



エコカードシステム

■ふつうの人が変われば、環境も変えられる

地域で環境活動の輪を広めるため、エココミュニティ会議をつくっている。特徴は、西宮では環境問題に直接携らない団体にも声を掛けていること。一部の熱心な人が活動するのではなく、緩やかな人付き合いのネットワークの中で、課題を見つけ、少しずつクリアしていく。

■子どもと企業の出会いは生き方論に繋がる

子どもが社会に出るまでに会う大人の職業は、下手をすると教師ばかりになる。社会を構築している職業を知り、企業の価値観・多様性を知っておかないと、子どもは人生の進路を選択する時期に、何を目標としていいのか分からない。スポーツ選手や、歌手だけしか見えなくなる。

企業との出会いは生き方論につながっていく。子どもに生き方論を見せれば職業への価値観が変わる。子どもに教えることで、大人も学びなおすことができる。



事業者と連携した環境学習

3. 環境学習は不易流行

■環境問題は変わるが、学習はずっと続く

環境学習とは「不易流行」だと思いつつ。環境問題は時代によって変わる。昔は水銀などの重金属が環境問題だった。

一方、学習は変わらないもの。人間の歴史は学びの連続。学び続けた結果、現在がある。学んで次の時代を考えていくのは、将来ずっと続いていく「不易」なことといえる。

■20世紀の反省からCSRが生まれた

20世紀はたくさん物をつくって、どんどん売って、豊かになって幸せという時代で、他人の幸せという考えが抜けていた。他人の幸せを無視したために環境問題が起きた。弱者の負担のもと、先進国の発展があった。それを見直そうというのが「企業の社会的責任（CSR）」といえる。

■持続可能な開発のための教育（ESD）

「環境教育」という言葉が少しずつ変化している。文部科学省の教育指導要領に「持続可能な社会」という言葉が加わった。環境問題を考えるために環境だけやっていたらダメ。平和や人権、経済、政治など色々な問題を考えなければならない。色々な問題の根っこを解決するための考え方が、

「ESD（持続可能な開発のための教育）」である。

六甲山でも、かつて六甲山を支えた企業が撤退し、人が去り、関心が薄れた。すると、自然が放置される。いろんな分野が相互に結びついている。

■21世紀は統合化して考える力が必要

今、世界中で言われているのが、学校では「生きる力を育む教育」「持続可能性教育」、企業では「組織の社会的責任」。この3つは不思議にも一緒のことを言っている。社会が求めているということだろう。これまでの社会は生産性を高めるために物事を分散化してきたが、これからは統合化してものを考える力が求められる。

環境に携る人間が平和や政治や経済に首を突っ込まないと、次の社会が展望できない。経験豊富な年配の方が次の世代に経験を引き継いでいくことも大事になる時期だと思う。

質疑応答

子ども対象の環境学習は学校では不十分？

環境問題には受身ではない、主体的な取り組みが必要だ。日本は経済優先で来たので、市民社会が成熟していない。本来は自分たちのまちのことは自分たちでやるのが基本だと思う。

まとめ（小川さん）

阪神大震災以前の環境学習は、地球大好き、人間大好き、生き物大好き人間集まれ、というものだったと思います。ところが震災後、「自然が怖い」という子どもが出てきました。これまで自然は人間にとって良いものとしか見てきませんでした。震災で、自然を守らないといけないという一方的な考え方もひっくり返されました。地球の中で生かされている存在として客観的に、相対的に生きられる力が環境分野でも必要だと思います。

事務局より

地域全体を巻き込み、環境を変える取り組みにまい進されている小川さんの活動ぶりに敬服します。六甲山発で地球人としての視点を育て、環境に関わっていくことが大切だと実感しました。

◆参考・配布資料など

・パワーポイント「六甲山系を含む里山保全と環境学習」
・西宮市セイフティ&エコガイド活動マニュアル
・甲山自然環境センターだより
・甲山農業塾チラシなど

NPO法人子ども環境活動支援協会（LEAF）
小川 雅由 おがわ まさよし
〒662-0832 兵庫県西宮市甲風園1-8-1-1F
TEL：0798-69-1185 FAX：0798-69-1185
WEB：http://leaf.or.jp/

◆参加者の声～アンケートより～

- ・六甲山での活動をする上で、継続は力だと理解できた。
- ・全国の数あるNPO法人の中でもパイオニア的な活動をされていると思いました。
- ・事業経営を発展されることを期待しています。

◆参加者：18名（50音順・敬称略）

浅井 審一 伊澤 信雄 大垣 廣司 岡谷 恒雄
小川 雅由 尾崎 尚子 白岩 卓巳 伊達奈保子
堂馬 英二 堂馬 佑太 長谷川友彦 福永 一登
藤井宏一郎 松井 光利 森 康博 八木 浄
米村 邦稔